S. Ashina

＜前回＞近代聖書学の諸帰結

（１）イエス研究をめぐって

１．パネンベルク「聖書原理の危機」（1963 年の講演）

「テキストの思想世界と現代の思想世界との隔たり」、「聖書の諸文書は矛盾なく内容的に一致しているという意味での古い聖書正典（der biblische Kanon）の概念は、崩壊し去った。」（13）

２．19 世紀におけるイエス伝研究とその挫折（Ａ．シュヴァイツァーの総括）

懐疑主義

３．ブルトマン『イエス』（未来社）

「イエスの「人となり」に就いての興味も排除されている」（12）、「私個人としては、イエスは自分をメシアと考えなかったという意見である」、「それは結局のところ、この問題については確かな事は何も言えないからではなく、むしろこの問題は副次的な事柄だと思うからである」（13）、「その意志したところは、実際、一連のまとまった命題や思想として、教説としてしか再現され得ない」、「このものは事実ただイエスの教説としてのみ捉えられ得るのである。」（14）

４．伝承史：イエス→→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集

・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判）

・編集者の意図の解明（編集批判）

（２）イエスと癒し

＜健康・病＞問題群

P.ティリッヒ『宗教と心理学の対話　人間精神および健康の神学的意味』教文館、2009年。

７．イエスの奇跡物語（治療奇跡）

イエスは病の治癒なしに、病の癒しを行ったとは言えないか？

奇跡テキストはいかに読まれるべきか　→　ふさわしい問いとは

10．新約聖書学の代表的議論から

1)荒井　献　『問いかけるイエス　福音書をどう読み解くか』NHK出版、1994年。

「第一五講　「自分の家に帰りなさい」－「悪霊に取りつかれたゲラサ人」のいやし　マルコ五・一－二〇」　190-202 頁

・奇跡物語の最古層、帰還命令→「癒やし」とは何か、その社会的次元

・荒井献の新約聖書学のポイントの一つ

『イエスとその時代』（岩波新書　1974年）

・イエスにおける「民衆の視座」（民衆と共にあるイエスの振る舞い）と「相対化の視座」（神は相対化の視座として機能する）の明確化。「民衆と」「権力に」。

・奇跡物語伝承の様式史法則　→　「理念型」の再構成

11．ポイント　→　医療人類学：近代的見方の相対化となり得るか。

・疾病（disease）：身体的、心的

基本的に特定の次元に限定

病（illness）：精神的・宗教的を含む全人格的態度、複数の次元が複合的に関与する

・奇跡は物理的現実である前に社会的現実である

癒しの社会的次元：関係性の回復という奇跡

和解のない世界、にもかかわらず

驚くべき出来事＝恩恵・贈与

７．　宗教批判１ ―――フォイエルバッハ・フロイト

（1）フォイエルバッハ

１．現代キリスト教を規定する問いとしてのフォイエルバッハ問題
　　フォイエルバッハの宗教批判は避けて通れない
源泉は古代ギリシアの哲学的神話批判→マルクス、ニーチェ、フロイト、キルケゴール
　　人間が想像した神・神人同型論

２．フォイエルバッハの宗教批判の二つの前提
①人間の類的本質の無限性
②類的本質の外化（＝表現、疎外、投影）

３.「宗教は動物に対する人間の本質的な区別に基づいている ── 動物は宗教を持たない」
　　個体としての自分や他者の意識＋類的存在としての人間（人間性）の意識

４．人間の本質あるいは類（あるいはいわゆる人間性）：理性、意志、心情

５．類としての理性そのもの（種あるいは類としての人類）の無限性

６．人間は自らの活動を通して自己を自分自身から区別された客体として措定する（外化あるいは疎外）→「対象の意識は人間の自己意識であり」、「対象は人間のあらわな本質であり、人間の真実にして客観的な自我である」

７．ヘーゲルの意識論：「主観的精神→客観的意識→絶対精神」

８．知識社会学：外化（表現・創造）→客体化（制度化・実体化）→内化（社会化・自己同一性）

９.「他者は私の汝であり……私の他なる自我である。それは私にとって対象化された人間、私の顕わにされた内面である。すなわち他者は自分自身を見る目である。私は他者においてはじめて人間性の意識をもつ。他者を通してはじめて、私は私が人間であることを経験し感じるのである」
　　「孤独は思想家の欲求であり、共同は心情の欲求である。人は一人で考えることができるが、愛することができるのはもっぱら二人でなのである。愛においてわれわれは他者に依存している。」（上 163）

10.「宗教は無限者の意識である。したがって宗教は人間が自らの無限の本質についてもつ意識であり、かつそれ以外の何ものでも在り得ない」。「神の意識は人間の自己意識であり、神認識は人間の自己認識である」

11.「神は人間の鏡である」、「神学の秘密は人間学である」

12. 宗教：人間の本質を人間の外に存在する超越的なもの（＝神）として措定→偶像崇拝
「神を富ませるために、人間は貧しくならねばならない」、「神が主体的であればあるほど、人間はよりいっそう自分の主体性を疎外する」

13. 哲学の課題：このような神と人間の対立が類的本質としての人間と個人としての人間の対立であることを暴露することであり、人間から疎外された人間性を人間の側に取り戻すことなのである

14. 宗教批判（疎外克服のプロセス）は宗教自体に内在するメカニズムである。
　　先行する宗教への批判は、当初は無神論とされた。

「宗教の発展行程」「人間はますます多くの神を拒否し、自分自身を承認することがますます多くなるということ」（上 100）、「始めは人間は万物を区別なしに自分の外におく。このことはことに啓示信仰のなかに現われている。後の時代または開けた民族に対しては自然または理性が手渡しするものを、前の時代またはまだ開けていない民族に対して神が手渡しする。」（100-101）

「キリスト教は内面的な道徳的清浄を外面的な肉体的清浄から分離し、イスラエルの宗教は両者を同一視した。キリスト教はイスラエルの宗教とは反対に批判と自由との宗教であ

る。イスラエル人は神に命じられたこと以外には何をする勇気ももたなかった。」（101）
「キリスト教はイスラエル人が自分の外に神のなかへおいたものを人間のなかへおいたのである。」（101-102）
「イスラエル人に対してはキリスト教徒は教義を信じない人であり自由思想家である。」
「事物はこのように変化する。昨日はまだ宗教であったものは今日はもはやそうではない。そして今日無神論と認められているものは、明日は宗教と認められるのである。」（102）

15. ①フォイエルバッハによって批判された神
　人間の無限の類的本質が人間と対立するものとして人間の外に投影されたもの
　→人間は無限な自らの本体的人間性の実現を妨げられる、人間のエゴイスティクな幸福衝動の素朴な実体化
　最高存在あるいは最高価値として措定された神（形而上学的存在者としての神）
　バルト「フォイエルバッハの鋭い感覚は正しい」
　「神――少なくとも宗教の神――に対する信仰が失われて行くのはただ、懐疑論・汎神論・唯物論の場合がそうであるように人間――少なくとも宗教において認められているような人間――に対する信仰が失われるところにおいてだけである」、「人間を否認することは宗教を否認することである。」（122）
　宗教で問われているのは人間であり、この連関を主題的に取り上げたのがフォイエルバッハである（議論はカント・シュライアマハーに発端をもつ）。
②人間の類的本質の無限性の根拠
　「個別的には人間の力は制限されているが、結合されると無限の力となる。個々人の知は制限されているが、理性は制限されておらず、学も制限されていない。なぜなら、それは人類の共同行為だからである」
　→近代人の「信仰」（無限の進歩）＝楽観主義・ヒューマニズム
③現代の宗教的神学的思想は人間の疎外の克服、人間の本来的可能性の実現についてどのように考え、どのように答えているのか
　→「投影のメカニズム＝人間の本性」ならば、フィクション機能の積極的意味こそが問われるべきである（ユートピア精神の意義）
④フォイルバッハの宗教批判→マルクス的な無神論的な宗教批判（非宗教的宗教批判）
　→キルケゴール的な有神論的な宗教批判（宗教的宗教批判）

（２）フロイトの宗教論

１．無意識の発見（？）の意義　　cf.デカルト主義
　夢と宗教
　人間のリアリティにとって、「夢」とは何か。
２．フロイトの近代主義：科学としての心理学
　心理現象の因果的見方・遡及的見方（アルケオロジー）
　意識は無意識と連続的に、力動的につながっている
　　病・症状（結果）　→　無意識の抑圧（原因）
３．心のモデル（局所論）　→　経済論（力学的エネルギー論）＋解釈学
　　力と意味
　意識／前意識／無意識、自我／エス／超自我
４．治療のためのモデル化
５．神経症　→　抑圧理論
　抑圧されても消滅しない　→　症状：無意識内容の代理形成、置換・圧縮

６．夢：欲動　→　夢を生み出すエネルギー＝無意識的欲望　→　夢の生産・欲望の充足
検閲：圧縮・置換・形象化・二次的加工

７．エディプス・コンプレックスと性欲モデル
誘惑理論→誘惑は事実ではなく幻想の産物→エディプス・コンプレックス（三角関係）
→文化秩序の形成（欲望の収斂）

８．神は投影である　／ 宗教は幻想である（還元主義的解釈学）
・幼児期に形成された父親イメージの自然への投影
・集団的な強迫神経症としての宗教

９．近代人の宗教からの自立、啓蒙の勧め
↓
宗教的に機能する心理学（カウンセリング）
しかし、カウンセリングは宗教の代わりとなり得るか？

10. 個体発生は系統発生を繰り返す（反復説）→　心理学と民俗学：トーテミズム
抑圧と回帰

11. フロイトの宗教論の問題点
①科学主義（一種の信仰、科学主義という宗教）→証明されない仮説への依存
②モデルの不当な一般化（人類学からの批判）
③還元主義→想像力の積極的評価の困難さ
④宗教現象の多様性を適切に扱えない

12.『モーセと一神教』(1939)の意義
モーセとはだれか、ユダヤ人とはだれか。

＜参考文献＞

０．芦名定道「キリスト教神学と宗教批判」(『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版)
１．フォイエルバッハ　『キリスト教の本質』岩波文庫。
２．松丸壽雄　「宗教批判の行方」(大峰編　『神と無』) ミネルヴァ書房。
３．パネンベルク　「無神論の諸類型とその神学的意義」(『組織神学の根本問題』)
日本基督教団出版局。
『人間学』教文館。
４．レーヴィット　『ヘーゲルからニーチェへ』岩波書店。
５．半田秀男　『理性と認識衝動－初期フォイエルバッハ研究－』溪水社。
６．深井智朗　『アポロゲティークと終末論　近代におけるキリスト教批判とその諸問題』北樹出版。
７．フロイト　『トーテムとタブー』『モーセと一神教』(著作集６，８) 日本教文化社。
８．リクール　『フロイトを読む』新曜社。
10. 上山安敏　『宗教と科学　ユダヤ教とキリスト教の間』岩波書店。
11. 湯田　豊　『宗教とは何か』北樹出版。
12. 島薗進／西平直編『宗教心理の探究』東京大学出版会。
13. 松本滋　『宗教心理学』東京大学出版会。
14. W．ジェイムズ　『宗教的経験の諸相（上下)』『純粋経験の哲学』岩波文庫。
15. チャールズ・テイラー『今日の宗教の諸相』岩波書店。